感染性粉瘤の膿汁から *Facklamia hominis* を分離した 1 症例

◎川端 きり[1)]、甲谷 由香里[1)]、正路 舞[1)]、小堺 利恵[1)]、松尾 幾[2)]、髙橋 伸一郎[3)]
東北医科薬科大学病院[1)]、東北医科薬科大学若林病院外科[2)]、東北医科薬科大学医学部 臨床検査医学教室[3)]

【はじめに】

Facklamia 属菌は通性嫌気性グラム陽性球菌であり、皮下膿瘍の原因菌としての報告例があるが、報告数が少なく病原性は十分に解明されていない。今回感染性粉瘤の膿汁から *Facklamia hominis*（以下 *F. hominis*）を検出した症例を経験したので報告する。

【症例】

50 代男性。20XX 年から左鼠径部に腫瘤を自覚。20XX+5 年に腫瘤の疼痛、腫脹を認めたため、精査目的にて外科外来を受診した。視触診にて左鼠径部に 8x5 cm 大の膿瘍形成を伴う腫瘤を認め、超音波検査も含めて、感染性粉瘤と診断された。切開排膿、その後の処置継続、抗生剤（cefaclor）投与により治癒に至った。

【微生物学的検査】

黄白色を呈した膿汁が、嫌気ポーターで提出された。グラム染色ではグラム陽性球菌とグラム陰性桿菌を認めた。35 ℃、5 %炭酸ガス条件下で 48 時間培養後に、血液寒天培地とチョコレート寒天培地で微小なコロニーの発育を認め、自動分析装置 MicroScan Walk-Away（ベックマン・コールター社）では *Rhodococcus equi*（同定信頼レベル 80.76 %）と同定された。質量分析装置 MALDI Biotyper（日本ブルカー社）では *F. hominis*（スコア 2.47）と同定された。精査のため行った 16S rRNA 解析では、*F. hominis* に 99.6 %と高い相同性を示し、*F. hominis* と同定された。なお、嫌気条件下 48 時間培養後に、ABHK 寒天培地で *Peptostreptococcus* sp. と *Campylobacter ureolyticus* の発育は認められたものの、*F. hominis* の発育は認められなかった。*F. hominis* の薬剤感受性試験は DPS192iX（栄研化学）を使用し、MIC 値のみを参考値として報告した。

【考察】

F. hominis は、生化学的性状のみでの同定が困難であり、MicroScan Walk-Away の同定可能菌種に含まれていない。そのため、同様の自動分析装置にて同定を行った場合、誤同定される可能性がある。状況に応じて質量分析や遺伝子検査を追加し、正確な菌種同定を行う必要性が示唆された。

連絡先：022-259-1221（内線：1280）